介 護 職 員 自 己 評 価 表

2023年7月3日

事業所名	介護老人福祉施設　喜入の里

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	1人	
社会福祉士	2人	
あん摩マッサージ指圧師	1人	
看護師	2人	3人
介護福祉士	11人	2人
実務者･初任者研修	7人	2人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	26.3%	36.9%	29.3%	7.6%	

前回の改善計画

入居者が穏やかな日常生活を過ごしてもらえる為に、認知症ケアとして、①作業をしながらでも会話に努める、②回想療法などの心理療法の活用、③残存機能を活かした生活リハビリを提供する計画とした。なかでも、支援のなかでスタッフが「ちょっとした声掛けや会話」を行なうことに努めた。過去の記憶を頼りに話してもらうだけでも一定の効果が期待できるので、ミッケルアート回想療法・回想ライブラリーによる回想療法を活用し、会話のなかで得られる生活歴を振り返りながら入居者一人ひとりの自分史に反映することを心掛けた。支援はスタッフの経験やスキルで異なり、支援に一貫性を失うと効果は低下することから、社内外の勉強会やベテランスタッフによるOJTによりスキル向上を目指した。

前回の改善計画に対する取組み結果

写真・動画・絵を用いて興味をもってもらえる支援を提供した。ミッケルアート回想療法や回想ライブラリーは、概ね興味をもってもらえた。シンプルで分り易い素材を選んだが、重度認知症の入居者には活用できなかった。ベテランスタッフでは会話が弾み生活リズムを整えることに寄与したが、効果はスタッフにより大きく異なり、認知症ケアやコミュニケーションスキルを向上させる取り組みを検討する必要があった。経験の浅いスタッフのなかには、レクリエーションに苦手意識がある傾向があり、外部講師による講義と、AIによる表情解析に基づいた心理療法を実施し、算出された気分指数を活かして支援方針を検討する必要があった。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION　1	対象者の接し方や態度について	27.8%	44.4%	11.1%	16.7%	100%
SECTION　2	仕事上の態度について	22.2%	38.9%	33.3%	5.6%	100%
SECTION　3	食事について	27.8%	27.8%	38.9%	5.6%	100%
SECTION　4	移乗や移動について	27.8%	27.8%	38.9%	5.6%	100%
SECTION　5	排泄について	27.8%	33.3%	33.3%	5.6%	100%
SECTION　6	入浴について	27.8%	33.3%	33.3%	5.6%	100%
SECTION　7	着替えや整容について	27.8%	38.9%	27.8%	5.6%	100%
SECTION　8	服薬について	27.8%	33.3%	27.8%	11.1%	100%
SECTION　9	意思疎通について	27.8%	44.4%	22.2%	5.6%	100%
SECTION　10	行動障害について	16.7%	50.0%	22.2%	11.1%	100%
SECTION　11	普通の生活やアクティビティについて	27.8%	33.3%	33.3%	5.6%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

認知症ケアの取り組みとして、認知症に深い知見がおありの黒野明日嗣先生をお招きし、非言語の感情に関する実践的な「コツ」を学ぶ機会とした。外部講師による認知症の心理的理解と事例検討により知見を深めた。小集団で取り組む回想療法や体操は、入居者の日課として定着し入居者の楽しみの一つになっている。声掛けの機会を増やしたことで施設の雰囲気が明るくなり、意欲の高い入居者は進んで参加し、ほか入居者の参加意欲を高めている。一方、睡眠潜時が長い入居者もあり、睡眠データを用いて入眠時間を遅らせたうえで固定し、生活リズムを調整する必要があった。表情解析により算出された気分指数を活かして支援方針を検討する必要もあった。認知症ケアだけでなくレクリエーションにも苦手意識を持つスタッフがあり、メンターや主任等が一緒に関わり助言と指導を行った。経験の浅い介護職員へは、社内研修やOJTだけでなく、人事部による面談が準備され負担感は改善したものの、メンターの負担感は軽減されず、主任によるスーパービジョンの頻度を高める必要があった。

主任 水枝谷 芳文

外部評価者

コロナ禍で面会制限が続きましたが、新型コロナは5類に移行し季節性インフルエンザと同じ扱いになりました。社会は日常を取り戻しつつある中、全入居者のご家族を対象にアンケート調査を行い、ご家族の要望に則して直接面談できる仕組みを準備し提供していました。入居者と家族の間にあった仕切りが無くなり、直接会い触れ合えるようになったことは喜ばしいことですが、第9波に入ったとする判断もあり、引き続きクラスターへの警戒は必要です。特に、虚弱高齢者の多い特養では感染対策の徹底が問われます。介護にかかわる方は、もうしばらく予断を許さない状況が続きそうです。人との関わりが減少した入居者の日常生活を、少しでも活動的に過ごしてもらえるように「ちょっとした声掛け」を支援ごとに行なうことに努め、支援で得られた過去のイベントについて家族から聞き取り、入居者一人ひとりの生活歴の把握に活かしていました。家族を巻き込んだ取り組みは評価できます。睡眠潜時が長く生活リズムの改善が求められるケースがありました。睡眠データに基づき入眠時間を調整する必要がありそうです。残存機能を活かした生活リハビリで介護度の重度化防止を図り、入居者の日々の生活を切り取った写真で家族の不安解消につないでいました。経験の浅い介護職員は人事部による面談が準備され負担感は改善していました。総合的な評価は、様々な取り組みが実践されていることが推察されました。
今後も地域に根差した事業所として頑張ってください。

〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37-11-302
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
博 士(社 会 福 祉 学)　田　中　安　平